

§1 渡印求法の中国僧

桑原隲藏「入竺求法の僧侶」1908 『桑原隲藏全集』第2巻所収

「東漢末以後に於ける入竺求法の僧侶は千を以て数ふべく、一々枚挙するに暇あらず・・・」

ほかに海路があるが、陸路はおよそ三条に分類し得る。

○南道 崑崙の北麓沿いに西進、ホータン、ヤルカンドなどを経、葱嶺をこえてパミールより
インダス河の上流に沿い、北インドにはいる (西域南道)

○北道 天山の南麓沿いに西進、トルファン、カラシャール、クチャ、アクスなどを経、氷嶺
で天山を横切り、天山北路より中央アジアを経て北インドにはいる (西域北道)

○吐蕃泥波羅道 黄河の上流、西海の側を過ぎ、チベット、ネパールを経て北インドにはいる
もの (吐蕃道)

長澤和俊『大唐西域求法高僧伝』小考 1976 『シルク・ロード史研究』所収

唐の義浄がインドおよびスマトラにおいて親しく相遇または伝聞した初唐、7世紀後半の渡天竺
僧は、再訪した4人を含め65人いた。

*往路に利用したルートによる分類		*インドまたは師子国に到達できなかった者 23人	
西域路	14人	途中で死亡したもの	12人
吐蕃道	8人	シュリビジャヤに滞留した者	2人
南海路	41人	行方不明の者	2人
経路不明	2人	途中から帰国した者	7人
		到達できた者	41人
*目的地に到達した者41人のその後		*途中死亡者を含め帰路のルートによる分類	
インドでまたは帰途死亡した者	18人	西域路	9人
無事帰国した者	5人	吐蕃路	5人
行方不明の者	11人	南海路	10人
彼地に滞留した者	7人		

§2 玄奘三蔵の生涯

僧玄奘(602頃～664) 河南省陳留の人、地方官僚の子、兄を頼って洛陽に出て、13歳で得度
法名を玄奘とした。四川省成都などで修行を積み、23歳で国都長安に移った。仏教教理を研究す
るため天竺(インド)に渡る悲願を立て同志の数僧とともに唐朝に願い出たが許されず、ついに國
禁を犯して単身インドに向かう決意をかためる。

貞観3年(629)9月出発。蘭州で黄河を渡り、河西回廊を通る。高昌国王鞠文泰の厚遇と庇護を受け
る。天山南路の屈支国(クチャ)、跋禄迦国(アクス)を過ぎ、天山山脈を凌山(峠の名)で北へ越え
清池(イシク湖)の岸にいたる。イリ河上流域、シルダリア上流域を西進する。西突厥の葉護可
汗に会い庇護を受ける。トルキスタン低地を南下、縛婁河(アムダリア)を南へ渡り、現在のア
フガニスタン北部低地に到った。大雪山(ヒンドークシュ山脈)を越え、梵衍那国(バーミアン)
を訪れたのち、出発後2年にして北西インドのガンダーラ地方に入った。

カシュミール国王都シュリーナガルに2年間滞在 ガンガ中流域各地を巡歴 ルンビニ(誕生
の地) クシナーラー(入滅の地) ベナレス郊外鹿野苑(最初の説法の地) ブダガヤー(成道の地)、

北にはパミール山地南縁をなす Sadarin 山脈と Wakhan 山脈が、南には Hindu Kush 山脈が
らなる。タジク系、ワヒ農牧民が居住する。

古来バクトリア平原とタリム盆地を結ぶ交通路として利用されてきた。

玄奘が残した記録からうかがえるパミールとワハーンの姿

資料②『大慈恩寺三蔵法師伝』巻の第五からの抜粋

・・・ここから東行二百余里で鉢創那国に至った。ここもトカラの故地である。寒さと雪のため、法師はここに一月あまり滞在した。バダクシャーから東南方へ山道二百余里で涇薄健国インヴァカンにつき、さらに東南に險路をゆくこと三百余里で屈浪土犂国クラナに至った。ここから東北方へ山道をゆくこと五百余里で、達摩悉鉄帝国ダルマスティティに至った。この国は二つの山の間にあり、ヴァクシュ河に臨んでいる。形が小さくてしかも健やかな善馬を産する。風俗は礼儀を知らず、性凶暴で、形も醜悪であり、眼は碧緑色の人が多く、他の諸国と異なっている。伽藍は十余カ所にあり、その国都は昏駄多城カンダータである。

・・・ここからまた東方に山道を進むこと七百余里で波謎羅川に至った。この川は東西千余里、南北百余里で、二つの雪山の間にあり、葱嶺の中にあつて風雪が吹きまくり、春夏になつても止まない所である。その地はいたって寒いので、草木もきわめて少なく、穀物も稔らない。この付近一帯は蕭条として人影も見えない所である。

・・・この河谷から東方に出て、危険な道を登り、雪を踏んでゆくと、五百余里で渴槃陀国に着く。城は峻嶺の上に建てられ、北側に徙多河が流れている。その河は東方に流れてはるかかなたの塩沢に入り、その後地下を潜流して積石山に出て、中国の河源黄河の源流となっているのである。

資料④『大唐西域記』巻第十二からの抜粋

達摩悉鉄帝国は二つの山の間にあり、靺鞨国モグヘルの旧領である。東西千五、六百里、南北の広さは四、五里で、狭い所は一里を越えない。縛婁河バロウに臨み、曲がりくねっている。小高い丘が或いは高く或いは低く、砂や石が一面である。寒風は凄じく、ただ麦や豆だけを植えている。樹林は少なく、花・果に乏しい。多く良馬を産する。馬の形は小さいけれども、山地を馳渉するに耐える。人々の間には礼儀なく、人の性質は乱暴である。姿形は卑しく、衣服は氍毹クダや褐である。眼は碧緑である点が諸国に異なっている。伽藍は十余カ所、僧徒は少ない。昏駄多城は国の都である。・・・

渴槃陀国は周囲二千余里ある。国の大都城は大きな岩山に基礎を置き、徙多河を背にしており、周囲二十余里ある。山々が連なり、川原は狭隘で、穀作は僅かで、菽・麦が豊富である。樹木は稀で、花・果は少ない。丘も野も荒れはて、城や村も住民は少ない。俗として礼儀なく、人々には学芸も乏しい。性質は荒々しく、武力の点でも驍勇である。容貌は醜く、氍毹や褐を身に着けている。文字・言語は、おおむね佉沙国と同じである。さりながら信仰は心得て、仏法を尊崇している。伽藍は十余カ所、僧都は五百余人、小乗教の説一切有部を学習している。・・・

[参考資料]

- | | | |
|---------------------|-----------------------|-----------|
| ①前嶋信次 (1952) | 『玄奘三蔵』 | 岩波新書 |
| ②慧立・彦悰/長澤和俊訳 (1998) | 『玄奘三蔵』 | 講談社学術文庫 |
| ③中野美代子 (1999) | 『三蔵法師』 | 中公文庫 |
| ④玄奘/水谷真成訳 (1971) | 『大唐西域記』 | 平凡社 |
| ⑤東山健吾 (2004) | 『シルクロードの足跡』 | NHKライブラリー |
| ⑥長澤和俊 (1993) | 『シルクロード』 | 講談社学術文庫 |
| ⑦酒井敏明 (2000) | 『旅人たちのパミール』 | 春風社 |
| ⑧平位 剛 (2003) | 『禁断のアフガーニスターン・パミール紀行』 | ナカニシヤ出版 |